

司馬

shiba ryotaro

遼太郎

NHK 街道をゆく プロジェクト

の風景

6

NHKスペシャル

沖縄・先島への道／奥州白河・会津のみち



司馬

shiba ryotaro

遼太郎

NHK「街道をゆく」プロジェクト

の風景 6

NHKスペシャル
「沖縄・先島への道」奥州白河・会津のみち

●執筆者

NHK「街道をゆく」プロジェクト

浦林竜太(番組制作局 教養番組部ディレクター)——I

秦 正純(編成局 スペシャル番組部チーフ・ディレクター)——II

司馬遼太郎の風景

⑥ NHK スペシャル「沖縄・先島への道／奥州白河・会津のみち」

1999年3月25日 第1刷発行

著者 | NHK「街道をゆく」プロジェクト

発行者 | 安藤龍男

発行所 | 日本放送出版協会

〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町 41-1
電話 03-3780-3318(編集) 03-3780-3339(営業)
振替 00110-1-49701

印刷 | 日本写真印刷

製本 | 石津製本

〔R〕＜日本複写権センター委託出版物＞

本書の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。
落丁、乱丁本はお取り替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

© 1999 NHK, Printed in Japan. ISBN4-14-080403-3 C0395

司馬遼太郎の風景 ⑥ NHKスペシャル「沖縄・先島への道／奥州白河・会津のみち」

ブック・デザイン
蟹江征治

司馬遼太郎の風景①

目次

I 沖繩・先島への道

原倭人の風姿を求めて（沖縄本島）	9
最果ての先島諸島へ（石垣島）	43
地上の樂園（竹富島）	60
黒潮の始発駅（与那国島）	88

II 奥州白河・会津のみち

会津の宿命	115
奥州の輝き	131

儒教の光……………142

悲劇への助走……………149

儒教の陰……………164

容保と顔真卿……………176

発光する精神……………188

あとがき……………202

引用文献／参考文献……………204

Ⅰ 沖縄・先島への道

飛行機が那覇空港を飛び立って針路を南西の石垣島にとつたとき、いかにも黒潮のふるさとへゆく思いがした。

●
われわれが、八重山諸島の最南端から北海道の最北端にいたるまでの島々に住み、その生産文化の内容と形式をきめてきた重要な要素が、

古くは沿岸のひとびとから

「黒瀬川」という親しみをこめた名称でよばれてきたこの暖流といえる。

●
そのもともとの始発駅は、

私の勝手な思いこみだが、八重山諸島もそのなかにふくまれる海域ではないか。私どもの旅の目的は、要するにその始発駅付近にゆくことなのである。

〔沖縄・先島への道「街道をゆく6」〕

原倭人の風姿を求めて（沖縄本島）

「琉球諸島」への憧憬

私にははじめての沖縄だった。「オキナワ」という響きが語りかけてくるもの。実に強烈で、そしてミステリアスである。それは、日本のどの地方にもない独特な「何か」があるからに違いない。以前、北海道や四国や山陰のある地域に、はじめて赴くことになったとき、出発前に気持ちの高まりのようなものを感じたことはなかった。しかし、沖縄にはそれがある。

司馬遼太郎さんの『街道をゆく』『沖縄・先島への道』を熟読する前に、まず地図帳を広げてみた。まずは地図からという、司馬さんの流儀にならったといえは聞えはいいが、とにかく私は沖縄について何も知らなかったのである。

九州の南端から南西に向けて点々と島が続くが、五〇〇キロメートル先の与論島まではまだ鹿児島県。沖縄県は県庁所在地・那覇市がある沖縄本島から始まる。ここから南西へと広がる島々を「琉球諸島」と呼ぶ。台湾まであと一〇〇キロメートルという日本最西端の与那国島^{よなぐに}まで、延々六〇〇キロメートルにわたって連なる大小の島々がすべて沖縄である。日本が列島弧をなす国であるという現実が、琉球諸島の詳細図から一目瞭然に焼きつけられる。一ヘクタール以上の面積を持つ島嶼^{とうしょ}の

数は百六十にも及び、そのうち有人島は四十八を数える。たった一人が暮らす外離島そとばりまですべて足し合わせると、沖縄の住民は約百三十万人。百数十万という人口が多いのか少ないのか、一概に判断しづらいが、いづれにせよ沖縄県人は日本人の百人に一人ということである。しかしながら、沖縄には百分の一とは思えないほどの圧倒的な存在感がある。地図帳のデータを参照しながら、まだ見ぬ島々を思い浮かべ、なぜかそんな気がした。

司馬さんが『街道をゆく』の旅で、この沖縄の島々を訪れたのは一九七四(昭和四十九)年、今から二十五年前のことである。この年はオイルショックの直後で、人々がトイレットペーパーに群がり、電力節約のために盛り場のネオンの消えていたところである。ネオンの消灯は高度経済成長の道をひた走ってきた戦後日本社会のかげりも象徴していた。この年のGNPは実質成長率マイナス〇・七パーセントと、戦後初のマイナス成長に転じ、経済の悪化とともに公害問題、ゴミ問題、住宅問題、労働問題など、生活を取り巻く諸問題が噴出していった。

一九七四年の初頭、司馬さんは大きな転換点にさしかかった日本の姿を、東大阪の自宅の書斎からじっと眺めている。

秋から今年(一九七四)の冬にかけ、どこへも行かずに過ごした。じっと家の中に引き籠もっているという気分は、決してわるくない。

ただ、物をしらべたり、書いたりしている暮らしを十数年もつづけていると交遊関係がひどく単純化してしまう。そのかほそい数の友人知己たちにも欠礼が重なり、会うことがまれになって、その鬱屈が、不意に人恋しさになって噴き出るようにも思える。そういう、ややかつ、えたとときに、

発作的に旅の計画をしてしまう。

〔「沖縄・先島への旅」街道をゆく6〕

そして春四月一日、司馬さんは堰を切ったように沖縄へ向け旅立つ。なぜこの時期に沖縄だったのか。最終目的地は最果ての先島諸島である。「晴れた日には台湾が見えるという」与那国島、そしてできれば日本最南端の「波照間島」にも行ってみたいと、思いをめぐらす。「辺境に文化あり」と考える司馬さんにとって、興味がふくらむ土地であることは間違いない。しかしそれ以上に、沖縄、ことに先島には日本民族のルーツ、日本の原風景が缶詰のように封じ込められているという、予感と期待があった。言語、宗教、風俗、そして日本人の気質。高度経済成長の行き詰まりという閉塞状況にあつて、もう一度日本という「土」をその原型から振り返って見つめ直してみたい。そんな司馬さんの衝動が、沖縄・先島行きを促したように思えてならない。

そして、この旅立ちから四半世紀を経た今、私たち「NHKスペシャル・街道をゆく」取材班も司馬さんの足跡を追って沖縄に向かった。折しも時代は平成大不況。先行きが不透明で人々が意気消沈しているという構図は一九七四年と酷似している。沖縄の旅を通して司馬さんが日本人に投げかけようとしたメッセージは、きっと今の日本人にも届くはずである。もしかすると、混迷の世紀末を迎えた今こそ、沖縄の地から発せられるメッセージは当時以上の輝きとインパクトを持つかもしれない。出発前から未体験の地である沖縄に漠然と感じ入っていた私は、そんな大きな期待を抱きつつ、那覇空港に降り立った。



「沖縄・先島への道」関連地図①

うりずんの「首里」

沖縄の玄関口である那覇空港には独特な雰囲気が漂う。それは、離発着する民間機に交じってうごめいている戦闘機や輸送機のせいに違いない。一瞬、この空港までも米軍基地の一部なのかとがく然としたが、実は自衛隊であつた。軍事関係の施設はすべてアメリカが押さえているためか、自衛隊機と旅客機がそれほど広いとはいえない空港を共同で使用しているのである。隊列を組んで訓練する戦闘機は、滑走路を飛び立つまで結構な時間を要す。先を急ぐ人々を乗せた民間機が、軍用機の離発着をじつと待つことは日常茶飯事のようなのだ。

先島を目指す場合、現在は東京や大阪、福岡から直行するジェット機が毎日飛んでいるため、この那覇空港を経由しなくてもよくなった。しかし、司馬さんの訪れた当時はそうはいかない。那覇で小さいプロペラ機に乗り換えである。司馬さんはすぐに飛行機を乗り継がず、一泊二日、沖縄本島に身を置くことにした。大阪・伊丹からの飛行機は定刻に到着。タラップから降り立った司馬さんは、意表をつく「肌寒さ」を、その第一印象として書き記している。

沖縄の四月は「うりずん」という。それなりに寒い冬が終わり、大気や大地が潤いを増して暑くなってくる時期を指す言葉である。海水浴がちらほら始まるころでもある。うりずんなら、暖かいか暑いかだろうと考えていた常識は破られた。異常気象を不吉な時代の到来と重ね合わせるかのよう

に、司馬さんは旅の第一歩を踏み出すのである。

司馬さんがまず向かったのは、那覇市郊外の丘陵地帯にある首里の町だった。首里は十五世紀、沖縄本島に誕生した初の統一王朝「琉球王国」の都であり、沖縄を代表する観光スポットである。

首里の旧王府への坂を登ることを楽しみにしていた。坂を登りすすむにつれて展けてゆく眺望のなかで、かつての琉球の美を想像する楽しみは代えがたいものだが、しかしこの思惑はあてがはずれてしまった。坂は、車のラッシュの名所になっていて、うしろから車に追われ、前から排気ガスを吐きかけられて、しかも車の行列は一寸きざみなのである。首里の坂は、低徊趣味にすら適しなくなっていた。

（沖繩・先島への道）

沖繩到着早々、氣候に裏切られ、今度は首里に通ずる心地よいはずの坂道に裏切られてしまった。何とも幸先の悪いことだが、実際、那覇の渋滞はひどい。鉄道がないことも自動車渋滞に拍車をかけているが、道路の整備がかなり進んだ現在でさえ、市内の要所の渋滞は解消されていない。司馬さんよりも十年以上前に沖繩に足を運んだ芸術家の岡本太郎氏も、同じ体験をし、同じ悲鳴をあげている。おもしろいのはイライラする私たち訪問者を乗せたタクシーの運転手である。みな様にのんびりしている。東京や大阪だと、客より先に運転手が裏道を探したりヤキモキしているように思えるが、那覇ではただなすがままである。これは沖繩の人々の氣質を反映しているのだろうか。とにかく、数十年の伝統を誇る那覇の渋滞は、もう立派な名物かもしれない。名物感覚で体験するなら、現在多少流れのよくなった首里の坂道よりも、那覇の中心地を貫く「国際通り」がよい。郊外を結ぶほとんどすべてのバスがここに乗り入れてくるこの通りは、世界一密度の高いバス通りともいわれている。朝から深夜までいつでも渋滞している。

司馬さんに乗せた車は、空港から首里の坂上までどのくらい時間を要したのか。変わらぬ車窓を眺めながら、司馬さんは次第に、この地がかつて受けた悲劇に目を転じてゆく。